脳障害児だけでなく幼児が漢字を読む――と言われても信じられないでしょう。もちろん私自身、最初から幼児が漢字を読むと知っていたわけではありません。

漢字はやさしいということを知るきっかけを与えてくれたのは、実は、私の長男です。

息子がまだ二歳になるかならない、よちよち歩きのころです。私は『国語教育論』という本を炬燵（こたつ）に入って読んでいました。そこへ、息子が来て、私の膝へ上り込んできたので、読んでいた本を伏せ、表紙を上にして炬燵の上に置いたのです。

そのとき、二歳の息子は『国語教育論』の「教」という字を指さして「きょう」と言ったのです。

びっくりしました。どうしてこんなむずかしい字が読めたのかと不思議に思いました。たまたま当たったのだろうと思っていると、今度は隣りの「育」という字を指さして「いく」と言ったのです。まさしく「教育」という漢字を読んだのです。

驚きました。妻に「この字を教えたのか？」と尋ねました。妻は教えた覚えはないと言います。教えてもいないものが読めるわけはないだろうと、しばらく考えました。

そのうち、妻が「アッ！　そういえば一度だけ読んでやったことがある」と言い出したのです。当時、妻は音楽の教師をしており、『教育音楽』という雑誌を定期購読していました。あるとき、息子が雑誌のタイトルを指で押さえて、「これ何？」と関くので、一度だけ読んでやったような記憶があるというのです。

そんなこともあるのか……私も半信半疑でした。普通では考えられないことです。

しかし、大人にしてみれば記憶が定かでないことでも、母親の持っている雑誌に関心を抱いていた子どもにとっては、たった一回でも「教育」という文字と発音とが頭の中に入ったことは事実です。

このとき、ひょっとしたら、幼児にとって漢字はやさしいのかもしれない、という気がしたのです。私たち大人は、漢字はむずかしい、幼児に教えるものではないという先入観をもっていますが、そうではないのかもしれないと考えたのです。私の漢字教育はこれがきっかけとなってスタートしました。